

世界に飛び出し、国際感覚を磨く ～ケニア・タンザニアに滞在～



■ワイズメンズクラブ国際協会西日本区

2012-2013 年度 STEP(Short Term Youth Exchange Program) 報告書

「とびらを開けてみよう！」



ワイズメンズクラブ国際協会
2012-2013 西日本区交流事業主任
石田 由美子 (宝塚クラブ)

この小冊子を手にしたユースのみなさん、「これって、ケニア旅行記？」と一瞬思いましたか？
「ケニアって自分には遠すぎるよな」って感じましたか？
同時に、「ケニアで一体、どんな経験をしたんだろう？」って興味もわきましたか？

これは23歳の男子学生、大西慎太郎君が2012年8月から11週間、あるプログラムに参加して遠いアフリカのケニア、そしてタンザニアで体験した数々の感動、学びなどをまとめたものです。

では、その「あるプログラム」とは？ 順序を追ってご説明していきましょう。

1. ワイズメンズクラブ国際協会

ワイズメンズクラブは1922年に Paul William Alexander によって米国オハイオ州で誕生しました。以来、青少年健全育成、国際ボランティア、国際協力募金などの活動を目的としている YMCA を支援し、地域に、国際に、世界各国で数々の奉仕活動を展開している国際奉仕団体です。

ワイズメンズクラブは、イエス・キリストが示された隣人愛の教えを実践し、あらゆる宗教、人種の区別なく、健全な青少年の育成や地域づくりを目指しています。

日本では1932年6月に日本区（後に東日本区・西日本区になる）が設立され、現在、合せて約3000名の会員がいます。

又、世界中のワイズメンズの数約30,000人です。（西日本区ホームページ・<http://www.ys-west.or.jp/>）

2. STEP (Short Term Exchange Program ユース短期交流事業)

ワイズメンズクラブはユースを対象にしたプログラムを持っています。

そのひとつがSTEPと呼ばれるプログラムで、外国、又は自国内の別の地域のワイズメンの家庭で3～11週間、共に生活するという青少年のための交換留学プログラムです。

大西慎太郎君が参加した「あるプログラム」とはこれなのです。

このプログラムの目的は、国内外の異文化間の相互理解を深め、将来、ワイズメンズ活動を担うなど、国際感覚を身につけたリーダーの育成を提唱しています。対象となるユースとは、15～25歳の学生、または社会人でワイズメンズクラブが推薦するユースとなっています。

3. 大西慎太郎君の挑戦

大西慎太郎君は、四日市ワイズメンズクラブの会員のジュニアです。アフリカ・ケニアという余り一般的でない国を選んだ理由は、この冊子に詳しく書かれています。今回、このプログラムが成功につながったのには、次の理由が考えられます。



大西 慎太郎 君

1. ケニアという国について、興味をもち、時間をかけてケニアの国情などを調べた。
2. 滞在中に何をしたいか、誰と話したいか、どこへ行きたいか、目的が明確化され、準備をしっかりと行って臨んだ。
3. 受入先のホストファミリーと充分連絡を取り、現地の事情、計画など教育プログラムをベースに、自分の研修内容の希望などについて、現地の受け入れ先との話合いが十分にできていた。
4. 国内外のワイズメンズクラブの協力があつた。
5. 本人が、常にまわりに感謝の気持ちをもって接していた。
などが考えられます。

4. ワイズメンズクラブからのアドバイス

「若者・国際・現場」これはユースのためにある言葉ともいえるのではないのでしょうか。
(2012-13 成瀬晃三西日本区理事が提唱)
大きな学びの場所として世界に目を向けてみませんか？

そして「扉を開けてみよう！」

ワイズメンズクラブはユースのみなさんのチャレンジを期待しています。

ケニア・タンザニア滞在

1.1 はじめに

2.1 STEPでの目標・目的

3.1 STEPでの活動

3.2 YMCAでの活動について

3.3 ボランティア活動

3.4 各種機関の訪問

3.4.1 企業・政府機関・国際機関の訪問

3.4.2 研究機関の訪問

3.5 国立公園での体験

4.1 活動から得られたこと

5.1 今後のSTEP発展のために

6.1 謝辞



1.1 はじめに

● Youth・Field・Global.

私がケニアへと出国する2週間前、四日市ワイズメンズクラブで壮行会を開いて頂きました。その際に、西日本区理事の故成瀬晃三様より頂いたメッセージの中で強く印象に残った言葉が "Youth・Field・Global" です。私は『若い世代が世界の現場で学び、今後の日本や世界をリードできる人材に成長してほしい』という激励のお言葉であると受け取りました。STEP 事業は正に "Youth・Field・Global" を実現できる事業だと思いました。そして、準備期間から製本作業に至るまでに、STEP 事業というものを通じ、大きく成長できたと考えています。

滞在先の国として私はケニア・タンザニアを選びました。せっかく海外に行けるのだから北米や欧州に行きたくはないのか、Y'smen international の本部があるジュネーブが良いのではないのか、そもそもアフリカの治安はどうかなど、多くの意見を頂きました。しかし、長年足を運びたいと思い続けたアフリカの地に行ける機会は、そうはないという想いと、アフリカ諸国に抱いていた私の印象や疑問を明確にしたいという想いで出国を決意しました。

STEP 事業では2012年8・10月に、ケニアおよびタンザニアに滞在しました。大学院進学後の1年目の夏のことでした。これまで何度も海外に留学したいと考えていましたが、参加したいと思うプログラムが無く、悶々としていました。というのも、交換留学の多くは一定の英語力があれば参加でき、海外の大学で授業を受けるものばかりです。また、それらの多くは日本でも学べることだと感じたからです。さらに、アフリカに留学できるプログラムなどはありませんでした。そこでこのSTEP 事業を通じ、私が経験したいと考えたこと全てを盛り込んだ留学を計画しました。



ボランティア先の子供達



スラムでの貧困撲滅活動

帰国後には今回まとめる内容を四日市クラブ・名古屋クラブで発表させていただきました。その他にも、多くの方々に報告をしました。そして少なからぬ人々がケニアやアフリカ、途上国の発展、貧困問題などに興味を抱いてくれていると感じました。そこで、読者の皆様にも本レポートで述べることの多くを共有していただき、アフリカの現状や課題等を考えるきっかけになれば幸いです。

ここで、誤解を招くといけないので言及致しますが、STEP 事業とは若い世代をアフリカや途上国に留学させる事業ではないことをお伝えいたします。参加者が学びたい内容に合わせて、世界中の Y'smen がいる地域に滞在し、目的を実現する事業と受け取っております。そこで、稚拙ながら私が経験したこと、考えたこと、学んだことをここにまとめます。読者の方（特に高校生や大学生）のなかに、将来はグローバルに活躍したい、海外留学したい、しかし何をすれば良いかわからない、良い交換留学先が見つからないなど、悶々としている方もおられるかもしれません。是非とも、このSTEP 事業に興味を持っていただきたいと思います。

また、すでに社会人となり、「留学はちょっと・・・」と思われる方は、「今の若い世代はこんな留学に行くようになったのか」と温かい目で読み進めていただけると幸いです。そして、私が共感した "Youth・Field・Global" というキーワードの重要性を感じ取っていただき、今後のSTEP 事業の発展に向けた協力がひろがることとなれば望外の喜びです。



JICA の訪問
ケニアの開発現場を学ぶ



マトマイニ最終日

2.1 STEP での目標・目的

● なぜケニアなのか

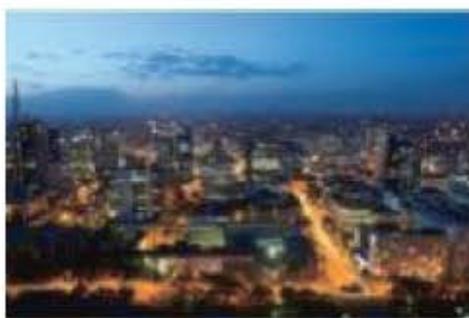
冒頭でも述べましたように、多くの方々から同様の質問を受けました。なぜケニアを選んだのか、明確な答えは帰国後も出せずにいます。しかし、2つのきっかけがあったように思います。その第一は、アフリカ諸国に多く集中する戦争や貧困問題はなぜ起きているのか、幼少期より疑問に持っていたことです。第二に、私自身の将来や日本の将来を考えたとき、アフリカという舞台は重要な位置にあったことです。

● 戦争と貧困

私とアフリカの接点は小学2年生の時、学校の廊下にあった国連のポスターを目にしたときのことです。そこにはシエラレオネの少年兵（当時の私と同世代くらいだったような印象がある）がライフルを持って写っていました。当時は戦争も貧困も分からず、なぜライフルを持っている

のかと疑問に思ったことを覚えています。その後、中学、高校生となって多くを学ぶうちに、世界中で起きている戦争の実態や貧困問題など、日本には関わることの無い問題の多くを学びました。この頃から、近い将来はアフリカに行き、実際の現状を現地で触れ、把握してみたいと思うようになりました。

また大学に進学した際、名古屋大学のOBで某大手商社の会長であられた方が「経営者はまずアフリカに行け」と書かれた文章に出会いました。その方はケニアにある世界最大級のスラム『キベラスラム』を訪問し、途上国における教育水準引き上げの重要性を訴えました。私は、日本が世界に果たせる役割、または果たすべき役割があると感じました。そして私自身もキベラスラムに行き、その現状や貧富の差の実態を学び、私にできることを考えたいと思いました。これがケニアを滞在先に選んだ一番の理由だったかもしれません。



タウンの夜景

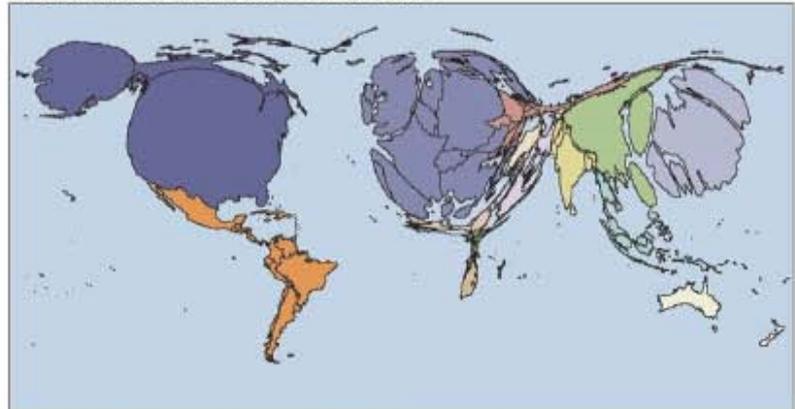


キベラスラムの様子

● 私の将来・日本の将来

第二のきっかけは将来のことを真剣に考えるようになったことです。私は1989年に生まれました。いわゆる「平成生まれ、ゆとり世代」と言われて育ってきた世代です。バブル崩壊時の日本に生まれ、世界からは“Lost two decade”失われた20年と言われてきました。漠然とした不安がありました。しかし、明治維新後や戦後の日本と同じく、大きく国を変えられる面白い世代なのではないかとも感じています。そして再び、日本が持続可能的に成長するためには途上国、特に今後30年、40年のアフリカ諸国の成長が重要な役割を果たすのではないかと考えています。

市場は世界をどう見ているか(世界各国のGDP規模をマップ化)



(注)購買力平価にもとづく為替レートで換算した2005年GDPによる。
(資料) World Bank, World Development Report 2009

右のマップは世界の国々をGDP換算の面積で描いた世界地図です。日本はこれまで、自国を大きくしてきました。マップ中の右端に巨大に描かれた薄い紫色が日本です。これまでに日本は形も分からないほどに大きく成長してきました。一方でアフリカ大陸は形も分からないほど小さ

な国々ばかりです。

今後の日本は、アフリカ諸国に代表されるような途上国とパートナー関係を構築し、ともに発展していく道を模索すべきではないかと考えています。そこで、それらの国々の雰囲気や現状はどのような状況なのか、そういったことを学生時代に知っておくべきだという思いからアフリカに行きたいと思うようになりました。なかでもケニアは、先に述べた通り貧困が根強く残る反面、都市は非常に栄えているという二面性を持っています。こうした貧困と発展の双方を学ぶことができることもふまえ、ケニアを滞在先に選びました。

● 目標・目的

これまでの人生で考えてきたアフリカの印象や疑問、さらには日本の将来について明確にするために、現地で何をやるかということが、計画段階で最も頭を悩ました。STEP 事業の良いところは、活動内容が参加者とその関係者が、関心を示す活動に重点を置いてすすめられる点だと理解します。すなわち、学びたいことを主体的に学ぶことができます。その反面、どこに行き、何を学び、何を議論するか、全てを自ら計画しなければなりません。そういった意味で、留学期間中だけでなく、計画段階から現地と打ち合わせをし、関係者全員で活動内容について検討、策定してきたことも 自らの成長に寄与した要因ではないかと思えます。

実際に私は以下の目標を設定しました。

ケニアでの生活を通じてケニアやアフリカ諸国の実情、文化や価値観などを多方面から知る。

他国から日本について考える。

ボランティア活動を通じ子どもの教育について考える。

大学生との交流から、今後の国を支える人たちの雰囲気を知る。

企業や NGO、政府機関などで働く人々から現在の開発現場を学ぶ。



ホームステイ先の家族



スラムの子供たち
夢はパイロット・医者・エンジニア

これらの目標のもと、ケニアやアフリカを直に感じ、視野を拡げ物事にとらわれない柔軟な思考を身につけたいと考えました。さらに、そうした経験を通じて、自分自身の成長に繋がられる留学にすることを目的とし、日常生活では現地の人に近い生活に留意し、(ホームステイは現地の生活を深く知る一因となった)、YMCA での貧困撲滅活動、孤児院でのボランティア活動、大学生との交流や NGO、企業、政府機関、国際機関の訪問などを行いました。また、留学期間のおわりに、アフリカの魅力であるサファリ(国立公園)を体験しました。特にキリマンジャロ山に登頂した際は、世界各国から人々が集まっており、世界の多くの方々と交流ができました。このこともまた、多くの刺激を受け、良い経験となりました。

3.1 STEP での活動

ケニア・タンザニア滞在中の主な活動は、先に述べた通り YMCA での貧困撲滅に関する活動、孤児院でのボランティア活動、研究所や NGO をはじめとした各種機関の訪問、国立公園の体験などでした。

3.2 YMCA での活動について

ケニアでの生活体験 ～日常生活から政治の話まで～

本プログラムでは基本的にホームステイにより現地に滞在しました。期間中、PIVP. Stanley Kinyeki 氏および REV. David S. Malaba 氏のお宅に滞在させていただき、ケニアでの生活を中心に食や文化、人々の価値観や考え方などを学びました。特に日々の生活は、現地の方々と最も密接に関わることができる時間であり、良い経験となりました。

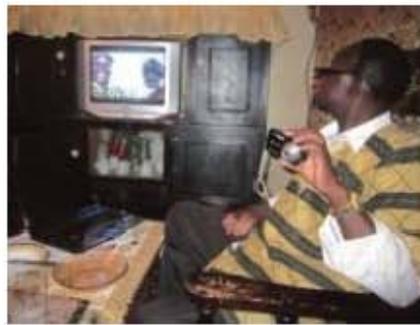
PIVP のお宅では食事を共に準備したり、洗濯を手伝ったりと、ケニアならではの体験ができました。家事一つとってみても、水資源に恵まれた日本とは違い、ケニアを含む東アフリカ諸国では慢性的な水不足状態にあります。洗濯の際は極力節水を心がけるものの、それでも断水が生じるといったあり様でした。また、停電もしばしば起こりました。インフラの整備は日本の得意分野であり、こうしたところで協力関係を結ぶことができたらと感じました。実際に、メーカーと日系商社がパートナーを組み、発電事業等に参入しつつあります。今後は農業やモノ作りの分野でもアフリカ諸国のパートナーとなり、ビジネスを主体とした支援を加速させることができると感じました。



ケニア食
自然食ばかりで健康体に！！
毎日美味しく頂きました



父親気分で毎日楽しく遊びました



Malaba 氏とテレビを見ながら談笑
番組は時間毎にスワヒリ語
と英語が切り替わる

水不足の問題は、食料価格の高騰と密接に関与しており、周辺国（特に内戦が続くソマリア等）では飢餓が発生するなど、インフラ整備の重要性を強く感じました。こうしたインフラ分野の開発は政治家に依るところも大きく、政治に対する不満など、多くを伺うことができました。

私が滞在した 2012 年の夏、ケニアでは国政選挙を控えており、重要な局面にありました。前回の選挙（2007 年）には選挙の不正疑惑が発端となり民族間の暴動で 60 万人を超える人々が住む場所を失い、約 1100 名の人々が命を落としました。国の政治一つで、多くの命が犠牲となる現状は悲惨なものでした。1960 年代、アフリカ諸国の多くが宗主国からの独立を果たしましたが、未だに国の発展が妨げられている原因も、この政治力にあると感じました。

帰国後、BBC ラジオが伝える 2013 年選挙の状況を耳にする度に、また暴動になるのではないかと心配でした。結果として数名の死者を出しましたが、選挙は終結に向かいホッとしました。と同時に、私が出会った子ども達やケニアの人々の生活が向上するような政治が行なわれることを期待しています。

● 教育機関としての YMCA

滞在期間中、YMCA が運営する YMCA Nairobi central, Shauri Moyo YMCA, Arusya YMCA (Youth), Moshi YMCA (Headquarter in Tanzania) ならびに、キベラスラム (Nairobi) 内にある小学校・職業訓練施設を訪問しました。これらの訪問では各施設がそれぞれ違う役割や問題を抱えていることを学びました。

Youth の比率が高い Nairobi では、多くのプログラムを組み教育を行う、Youth のための教育機関といった印象を受け、プログラムを通じ、今後のケニア、世界を支えるリーダーの育成に尽力していました。しかしながら、持続的に教育するためにはやはり資金が必要となり、先進国からの支援が必要なことも事実です。この問題はキベラスラム内の学校・職業訓練施設でも同じことが言えます。教材が不足し、設備も不足しており、さらには施設の維持に必要な経費も不足している状態でした。ここでは PIVP の尽力により、アメリカやカナダから資金を得ており、今後、施設として発展していくように感じましたが、持続的に運営するためには新たなシステム作りが必要です。

YMCA を教育機関として捉えた場合、教育者の教育も必要になってきており、教育者養成のた

めの教育機関設立のプロジェクト（日本では大学の教育学部やプロの塾講師が開くワークショップなどがその役割を果たす）が進行中でした。こういったプログラムはケニアの教育の質を高め、世界でプロフェッショナルとして活躍する人材の育成において不可欠であると私自身も考えています。

YMCA の訪問を通じて全体的に感じたことは、教育に対する想いが強く、特に Youth を育てるという考え方が浸透している点です。そのために教育者を教育するプログラムをはじめ、ワークショップを行うなど、非常に熱心なクラブばかりでした。しかしながら、それを持続的に行うための資金面では不安があるように思われました。YMCA の役割を明確にすること、メンバーのステップアップにおいて、YMCA をなくてはならないものとする、将来の YMCA を支えるメンバーの育成が成されると良いなと感じました。また、私自身は日本での YMCA の活動に参加したことがなかったため、YMCA とは何か、どうあるべきか、そして Youth を教育する教育機関として存在するために必要なことは何かなど、多くを考えることができました。



スラムで貧困撲滅運動
エイズの蔓延や犯罪の元凶として
雇用の創出の重要性を議論



スキルアップセミナー
Malaba 氏とともに



タンザニアのヘッドオフィス
これまでの発展の歴史や今後について議論

3.3 ボランティア活動

● 孤児院の自立運営

私はナイロビ内で運営されている MATOMAINI Children's Home(NGO)に1週間滞在し、そこで農業の手伝い、勉強を教えるといった活動をさせていただきました。

農業については現地スタッフも多く、運営の仕組みも完成されていました。この NGO を運営していくためには、寄付だけに頼った運営は不可能です。よって、自給自足に近い食の体系を創るとともに、農産物を販売することで、収益源とする必要がありました。そこで、日本食に頻繁に用いられる野菜を生産し、日本食レストランや在留邦人に販売することで収益を得ていました。また、フェルト人形を作る作業場も併設されており、そこで作られる人形も重要な収入源でした。

孤児院の子どもたちは毎日の仕事を割り振られ、草取りから野菜の収穫、家畜の世話など、実に良く働く子ばかりでした。まだ小学生の子どもも多いのですが、コミュニティにおける自己の役割がしっかり考えられています。そうした子どもたちに感銘を受ける一方で、ケニアは教育制度が不十分であり、将来の芽をつぶしていることが残念でなりませんでした。



朝から働く子供たち



フェルトで作られた手作りの人形
シングルマザーのママ達が作製

● ケニアにおける教育の課題

教育面という観点で考えてみますに、この NGO は学校教育を目的とせず、子どもたちには一日の生活の中で学習時間が設けられているものの、教師等の配備は成されていませんでした。そこで私は滞在期間中、子どもたちに勉強を教えることにしました。日本の小学生相当の子どもたちに算数を教え、中学生相当の子供たちには数学、化学、物理を教えました。この経験を通じ、ケニアの抱える教育の大きな問題に直面しました。また、日本における教育の問題も考えさせられました。

ケニアは、イギリスが宗主国であったこともあり、小学校高学年ともなれば英語を流暢に話します。しかし、数学や科学といった理系科目の質の低さを実感しました。日本の場合を考えると立場は逆となり、数学や科学の質は高いのに、英語教育は低い質となっているように思われまし

た。共通する問題点は教える教師の質ではないかと考えられます。

日本の場合、英語を流暢に話せる教師は少なく、授業で英語を話す機会もほとんどなかったため、授業は主に文法とリーディングのみであります。その結果、英文は読めるものの、話せない学生や社会人が多いことが近年問題視されつつあります。ケニアの場合は、数学や科学などの教え方を心得ている教師が少ないように感じました。それは特に数学において顕著であり、これらの教育の質は学習者である子どもの意欲を削ぎ、結果として卒業できない子ども、学校に行かなくなる子どもを増加させているように思われました。

学校に行かなくなった子どもたちは将来の働き口が無く、窃盗や売春に走るケースも少なくないそうです。YMCA や訪問した NGO では、そうした売春によりエイズを患った子どもたちの支援をしていました。教育インフラ一つが犯罪や病気を引き起こす、こうした現状を目の当たりにすると、教育水準の引き上げの必要性を強く感じました。また、私が卒業後に働く企業では、途上国の現地スタッフの採用や人材教育ができる環境整備をしていきたいと感じました。



受験生の Boni 君

彼はとても勉強熱心。平日は夕食後に、休日は仕事の合間に私のところへやってきて「勉強を教えてください」といつてきた。一つ教えると「なんで？ どうして？」と聞いてくる。将来はまだ分からないが、いっぱい勉強して日本に行きたいと話してくれた。将来が楽しみ。

● ケニアと日本の将来

ケニアでは人口における15歳以下の比率が42%(2010年 WHO 試算：世界27位)となっており、今後の経済発展を考慮したとき、若手教育は非常に重要となってきます。しかしながら、その子どもを支えられる人口が少ないことも一つの問題として挙げられます。よって、今後の教育制度改革やボランティアの重要性も増してくるのではないかと感じました。一方、日本は15歳以下の比率が世界最下位の13%(2010年 WHO 試算)であり、60歳以上の高齢者比率が世界最高位の30%(2010年 WHO 試算)であるため、高齢者を支えられるだけの労働者人口の減少が危惧されています。こうした日本とケニア(同様の問題を抱えるアフリカ諸国)のマイナス同士を繋ぎ合わせることで、両国にとってより良い環境整備が実現するのではないのでしょうか。

● 必要とされることの重要性

今回 MATOMAINI での滞在を通じ、強く感じたことは、「人に必要とされることの重要性」でした。子どもたちは、コミュニティで生活するために一人ひとりが働くことの重要性を理解しており、働くことを通じて、個々の存在意義を感じているように思われました。私は子どもた

ちに教育を提供する代わりに、子供たちからは働くことの意義や、小さなコミュニティでの個人の存在意義、生き甲斐のようなものを学ばせていただきました。こういった相互関係は、広い見地に立って考えてみますと、前述のケニアと日本の関係と他ならないように思われます。このような小さなコミュニティがひとつひとつ増えていき、世界に広がれば、より良い社会の実現に一歩近づくのではないかと思います。



イベントでダンスを披露する子供達



ウェルカムパーティー



お土産として持参したシャボン玉を追いかける子供達

3.4 各種機関の訪問

ケニアでのホームステイやYMCAでの意見交換、NGOでの活動を通じ、ケニアで生活する人々の目線から文化や価値観、考え方、生活に存在する問題点などを学びました。そして、各種機関の訪問では、企業、研究機関、政府関係者、国際機関で働く人々の目線から、より客観的に問題や課題を捉えることができたと思います。

3.4.1 企業・政府機関・国際機関の訪問

● 日本の役割・進出障壁

20世紀後半、特に1990年代はインフラ整備に日系企業が大きな役割を担いました。しかし21世紀に入ると、中国の技術発展により、建設費で勝る中国が大きく進出してきました。この結果、日系企業は道路工事やマンション建設などの事業から撤退し、高度技術を要する発電所のプラント建設などへとシフトしました。そのような状況でも、古くから行われてきた農産物のトレードは現在も盛んに行われている他、資源開発は進み、アフリカの重要度は増してきています。しかしながら、品質管理と自立的経済発展について、多くの問題を抱えていると思われます。

品質管理という点では、米を例にとると、日常生活でホストファミリーの方が米に混入した石を一粒ずつ取り除いてくださっているのを目にしました。コーヒーを例にとっても、何かしらの混入物が混ざっていることは珍しいことではありません。このように、安価な製品が好まれる時代にあっても高品質な製品を生み出す教育が必要になってきているのではないかと思います。

自立的経済発展という点においては、特に製造業では輸入に依存しているため、雇用の確保が難しい状態が続いています。失業率は高く、就職率は低い状態が続いています。よって製造業を发展させ、雇用を確保することがケニアの経済発展において非常に重要となっていると考えられます。また、タンザニアにおいても大卒のフルタイムでの就職率は5%程度と、極めて低い状態が続いており、雇用の改善は急務であると感じました。

製造業の発展や品質管理などは日本が得意とする分野であり、アフリカ諸国と日本が協力関係を結ぶ上で、足がかり的な解決策を模索すべきだと考えられます。近年のアフリカ進出企業の多くは、資源に目を向けた開発が中心になっているように感じられます。持続可能な協力関係を構築していく上では、より生活に直結した雇用の確保につながる政策が必要不可欠ではないかと思えます。

3.4.2 研究機関の訪問

● IPR, KEMRI

現在、大学で遺伝子工学を専攻している関係から、Institute of Primate Research:IPR (WHO 関連機関であり、霊長類を用いた感染症・疾病研究を行なっている研究所) および Kenya Medical Research Institute: KEMRI を訪問しました。研究機関の訪問では、アフリカ大陸の抱える熱帯病について、および、霊長類を用いた最先端研究について学びました。

熱帯病の研究については、2000年の『ミレニアム目標』においてWHOが熱帯病を“Neglected Tropical Diseases: NTDs”「無視されてきた熱帯病」と定義したことで世界の注目を集め、研究も進歩しつつあります。熱帯病の研究は国家間の流動性が増した現代において、熱帯地域(特にアフリカ諸国)だけの問題ではなくなりつつあります。例として、2004年に始まったアメリカでのウエストナイル熱の流行が挙げられます。

こうした現状をふまえ、アフリカ大陸のみならず、世界の人々の健康を考える上で、熱帯病の研究はさけて通ることのできない問題となりました。しかしながら、資金面、技術面、人材教育

において課題が残されている他、NTDs に対する注目度は依然として癌などの疾病研究と比べるとあまりに低いものとなっています。こうした現状を打破するためにも、より多くの研究者や企業関係者がアフリカの実情を把握し、将来の世界の人々の健康を考えていかなければならないと感じました。

また、霊長類研究では、上記の熱帯病に対するモデル動物を用いた研究もさることながら、文明の発展とともに今後も増加傾向にあるアルツハイマー病などの病態モデル作製、およびその研究が成されていました。これらは全人類を支えていく研究であり、今後の発展が期待される分野であります。より一層の技術協力や投資が必要になるのではないかと思います。



施設の前で記念撮影



KEMRI の学生と意見交換

3.5 国立公園での体験

STEP の期間中、Nairobi National Park, Ol Pejeta Conservancy, Kilimanjaro National Park の3カ所を訪れました。これらの訪問では、ケニア・タンザニアの有する魅力の一つである国立公園を体験することができました。

Nairobi National Park および Ol Pejeta Conservancy では野生の動物に触れることで、動物園で見るとは異なる、真の学びがありました。多くの動物は、正直なところほとんどが日本の動物園でも見ることができます。しかしそれらの動物を日本で『観察する』ことはあまりないように思います。というのも、日本では動物園に行けばいつでも見られる動物であり、観察するほど好奇心を駆り立てられることは無いからです。しかしサファリに行くことで、どこで出会うか分からない動物を積極的に探し、見つけたときには観察すね、動物園で見るとは違う感動がありました。特にシマウマを『観た』ときのことです。縦横の縞はこんなものなのか、シマウマにも種類があるのかなど、普通ならば感じないであろうことを感じられました。

● 真の学びとは？

サファリでの経験から、世界最上位の先進国となった日本の欠点について考えました。情報化社会が進む中、おおよそどのような情報にもアクセスすることができる時代となり、『深く学ぶ』

といったことが忘れ去られているように思います。私自身もインターネットから情報を得ることで、学んだ気になっていることが多々あります。しかし、この国立公園での体験を通じ、『本当の学び』とは、実際に体験したことや観察したことから生まれると感じました。昨今、景気低迷が続く世界経済においてイノベーションを起こしていくためには、このような真の学びが求められているのではないかと思います。



サファリの動物に感動



世界中の登山者が集う
Mt. Kilimanjaro(5895m)登頂

4.1 活動から得られたこと

今回の経験を通し、私は大きく3つのことを学びました。

第一に『自分が何を学びたいか』を設定し、それを実行に移していくことの難しさです。学びたい内容に対し、どのような行動からその内容を学ぶことができるのか、手段の選択肢はいくつかあるものの、限られた時間の中での最善策は何か、実行可能性はどうかなど、課題設定から実行するまでの全てを包括的に考える必要がありました。その過程で、関係する人々との価値観や文化の違いから、当初予測しなかった問題が生じました。それらを目指に向かい一つ一つ解決していく必要があり、そのプロセスや日本との環境の違い(良い面も悪い面も)を学ぶことができたことはとても良かったと思います。

第二に、私自身の無知を知ることができました。多くの活動を通じ自分自身について、または、日本の文化・価値観などを説明する場が多くありました。それらは日本語であれば曖昧ながら一定は説明できる内容です。しかし言語が変わることで、自分自身の中にある明確な内容しか伝えられませんでした。そこで、私自身『知ったように思っていたこと』が数多くあることに気がきました。こうしたことは、大きく環境が変わることでは学ぶことができないのではないかと思います。これまでの人生において、多くを学ぶ機会はありませんでしたが、それほど『伝える』機会がなかったように思います。よって、環境を変え、はじめから一つ一つ説明するという経験を通じ、改めてその難しさを感じるとともに、深く学ぶことの重要性を再認識させられました。

第三に、ケニアの長所・短所を考えることで、日本の長所・短所を考えることができました。

ケニアでの長所が日本では短所であること、また、日本での長所がケニアでは短所となる場面が多く見られました。これらも環境を変えることでしか体感できないものです。これまで当たり前のように感じていたことが、実は世界に出たときには当たり前でないこと、生きていく上で重要なことは何か等々、多くを考えさせられました。また、このように考えるに至ったのも、ホームステイの形をとり、より密接に現地の生活を体験できる STEP 事業のプラス面に他ならないと思います。

これらの3点の学びは、現地に足を運び大きく環境を変え、その土地の人々を知り、生活を知り、豊かさや価値観を知ることで初めて学べるものであったように思います。そして私自身、成長でき、非常に良かったです。

5.1 今後の STEP 発展のために

今回の11週間の留学では、私がこれまでに体験した留学やその他多数存在する留学のプログラムとは違い、語学習得や専門知識・スキル習得といった目的を持ちませんでした。そのため、参加者が主体となり、学びたい内容を学べるといった点で参加者の可能性を最大限に高められる留学だったと考えます。

2007年のリーマンショックに端を発した世界経済の低迷の中で、課題を設定し、解決していける人材が世界的に不足していると言われます。また、多くの国や国際機関、研究機関、企業がリーダーシップを発揮し、課題設定から解決までを担える人材を欲していると理解します。そこでSTEP事業のような『デザイン型』の留学は、今後必要とされる人材育成において重要な役割を担うと思います。また、私自身も今回の留学を通じて学んだことを自身の成長に還元し、21世紀を支える人材に成長したいと考えています。

このように、本プログラムの重要性は今後も重要性が増すものと予想されますので、多くのYMCAやワイズメンズクラブのメンバー、およびコメントに推奨していくべきプログラムではないかと思います。しかしながら、本プログラムが今後も発展していくために、資金面で大きな問題を抱えていると思います。本プログラムでは、現地YMCAメンバーがホストファミリーとして受け入れて下さったため、住居費はかかりませんでした。しかし、現地までの往復航空券などは決して安価なものではなく、ケニアから日本へSTEPを受け入れるなどといった場合にはより大きな支援が必要となります。この問題は、YMCA Nairobi centralのYouthが抱える問題とも一致します。

こういった課題を解決していくことで、STEP事業は世界的により重要性をもったプログラムへと発展するものと考えられます。

6.1 謝辞

今回、STEP 事業の参加に際しまして、尽力下さいましたワイズメンズクラブ国際交流事業主任であります石田由美子様、国際交流事業主査であります川本龍資様をはじめ、ワイズメンズクラブの皆様には心からお礼申し上げます。

また、ケニアでホストしてくださいました PIVP. Stanley Kinyeki 氏および REV. David S. Malaba 氏、そのご家族の皆様、そしてケニア・タンザニアで私に多大な影響を与えてくださいました 25 カ国 200 名を越す皆様方に心からお礼申し上げます。

STEP 事業は、2012 年のはじめ、参加に際しエッセーを書いたことに始まり、こうして製本化されるまでの 1 年半でようやく完結となりました。実に多くの経験ができ、生涯にわたり忘れられないものになったと確信しています。稚拙な文章しか書くことができず、私が伝えたかったことや "Youth・Field・Global" の重要性を共有していただけただか不安が残りますが、何か一つでも読者の皆様の心に残るエピソードが含まれていたならば幸いです。

私事ですが、来年度より大学院を卒業しようやく企業で働くこととなります。将来的には途上国、特にアフリカ諸国の発展につながる仕事ができればと考えています。STEP 事業を通して得られた経験を、今後の人生において 10 年、20 年後に、何らかの成果や価値につなげたいと思います。

帰国後に海外進出を模索している企業の方々とお話する機会があり、どうすれば途上国でビジネスを成功させられるかを議論しました。その都度、「利益を求めるのではなく、必要とされるビジネス（＝国や地域の発展につながるビジネス）をすれば必然的に成功する」という話をしてきました。また、そうしたビジネスを通じて、国の発展や人々の生活に貢献していきたいとも話しました。

ある日、「君にとって発展とは何か？」と聞かれました。国の発展とは・・・？

日本は世界的にみて発展した国です。しかし、この生活で幸せを感じている人は途上国と比べて多いのだろうかと考えました。答えは恐らく "No" です。ケニアで出会った人たちは、たとえ明日の生活がどうなるか分からない状況下にあっても前向きに生きていました。一日を精一杯生きていました。一日を大切に生きられることは、とても幸せなことだなと感じました。

ケニアの生活は正直に言うと不便な毎日でした。物資の面や情報へのアクセスなど、日本ではごく当たり前に行えることができません。この現状を思えば、日本は本当に豊かな国であり、普段意識することの無い日本での生活が、実に恵まれた環境であると改めて感じました。そのような環境で毎日の生活に目的を持ち、1 日の大切さを意識して生きられたならば、人生の豊かさ、そして日本という発展した社会での意義ある生活につなげられるのではないかと感じました。今、国の発展とは選択肢が増えることだと思います。途上国で、これまではできなかったことができるようになるよう、今後も日本人として精一杯努力していこうと思います。

2013年5月 大西慎太郎

発行 2013年7月31日 発行

発行所 ワイズメンズクラブ国際協会西日本区
〒532-0012

大阪市淀川区木川東 4-5-4 新上野ビル 3F

TEL 06-4805-0570 FAX 06-4805-0571

E-mail: info@ys-west.or.jp

発行者 2012-2013 年度 西日本区理事 成瀬晃三

